

箱庭療法の基礎的研究

—— 置く・積む・掘るの世界 ——

An Experimental Study of Sand-Play Therapy

— A World of Setting, Piling up and Digging —

秋山 幹 男

Mikio AKIYAMA

河合隼雄は、1965年スイスのチューリッヒから帰国後、Kalff, D. M. が深化させた Sandspiel を箱庭療法と命名し、1969年に「箱庭療法入門」を刊行した。1971/72年のころ母校の京都大学に戻られたのであるが、その少し後に当時広島大学の心理学教室で定期的に催されていた談話会に、講師として来広された。氏は、箱庭作品のスライドを大切にケースから出され、その一つひとつを映写しながら話をされたのであるが、今でもその時のことは鮮明に思い出すことができる。

時代は10年位前に遡るが、大学に入学した1962年、その時大学院生だった山下勲の研究の被験者になった。その中の研究の一つに、「ミニ玩具を使って、海と町をテーマにした作品を自分の好きなように制作してほしい」という課題があった。それは1964年に論文化されたのだが、ウェルトテストという名が付けられていた。これはわが国での先駆的な研究であったのだが、治療に用いるという発想を引き起こすためには、その後の河合の啓蒙・実践活動が必要であった。

以来35年の月日が流れ、ものすごい勢いでこの方法が心理療法の大切な道具の一つにまで成長してきたことは、誰もが認めるところである。談話会での出会いをきっかけにして、筆者も集中的に箱庭に取り組んでみたのだが、治療としてではなく、幼稚園児や学生を対象にした基礎的研究に終始するという状況が続き、箱庭ごっこようになってしまった（1977abc, 1982）。たしかに1970年代には箱庭療法の基礎的研究が盛んとなり、岡田や木村らは臨床分野と基礎分野の両方から着々と研究成果を積み上げていった。彼らを中心としたこれらの諸研究は、博士論文となり、本として世に紹介されている（岡田1984 木村1985）。最近になって、1980年代後半からの基礎研究をも取り上げての詳細な展望と課題が、平松・山口（1998）によってまとめ上げられた。一読して分かることだが、臨床分野では急成長を遂げてきているのに対し、基礎分野のそれは余りにも遅々としているという感じがする。河合は、基礎研究を否定せず温かい目で見守ってくれているのだが、どうしても臨床における「ア、ウン」の呼吸を実験的に捉えることができないままである。

1985年からスタートさせた心理学演習Ⅱでの「箱庭療法の基礎実験」は、学生達にとってとても

興味のわくものであるらしい。しかしながら、どうしてもこの演習は平板的になってしまい、箱庭療法のもつ神秘さや面白さを、層構造的に体験させられないまま今日に至っている。そんな試行錯誤の繰り返しの中で、ふと遊びどころが頭をもたげ、取り組んでみたのが1996年からの一つの試みであった。基礎実験への導入として用い始めたこのやり方は、なぜか心を引き付けるものがある。本研究は、1997年から1999年にかけて実施された「目を閉じて砂に触る」と「置く・積む・掘る」を取り上げ、これを6つのテーマに集約させながら、細かく検討してみることを目的とする。

方 法

被 験 者 初等教育学科心理学専修の3年生 30名

制 作 者 筆者（クライアント的立場で）

実験時期 1997年（平成9年）、1998年（平成10年）、1999年（平成11年）の前期に実施

実施場所 2号館2Fのプレイルーム

実施内容 1週目：触れてみる・眺めてみる（イメージ・トレーニング）… 本研究はここに焦点を当てている。2週目：作品を作る・観察する（イメージ評定／テーマ／物語） 3週目：2つの作品をもとに半年間のフィクション作り・発表 4週目：療法の背景にあるユング理論の解説と解釈にあたっての諸注意／各自のレポート作成に向けての取り組み方の指導

1999年の演習では、心の内を見せることのメリットとデメリットにも触れた。

① 自己防衛がいる ② 見守ってくれる人がいる ③ 枠がいる 等

1週目の内容：（1）触れてみる…目を閉じて砂に触る（2種類：肌理が細かい／肌理が粗い）（2）置いてみる…左手前・中央・右奥の3箇所絞る。人形を一人置いてみる／大木を置いてみる。（3）積み上げてみる…制作者（筆者）のイメージ「山」：左手前・中央・右奥の順に砂を積み上げる。（4）掘ってみる…大きく掘る：制作者のイメージ「海か湖」。掘っていく順番は同じである。細長く掘る：制作者のイメージ「川・河」位置は同じである（3箇所）。

なお、砂を使った場合の実施の順番は、大きく掘る・積み上げる・細長く掘るであった。

実施方法：一つずつ筆者の制作が整ったところで、箱庭の前に立ってもらい、イメージが浮かんできたらテーブルに戻り、表出されたイメージを言語（ことば）化し記録してもらう。このパターンを繰り返し行った。

結果と考察

I. 目を閉じて砂に触れてみる

本学のプレイルームには、2つの砂箱が用意されている。その一つは、肌理の細かい砂が約5 CM

の高さまで敷き詰められている。もう一つの箱は、それより肌理の粗い砂が入っている。その一つひとつに目を閉じて触ってもらい、その時に感じた気持ちを記録に残してもらった。この感触は、Tab.1 のように表現された。

Tab. 1 砂の感触（目を閉じる）

その感触表現は、かなり高い率で同じ言語（ことば）化がなされている。「さらさら」と「ざらざら」という受けとめ方は、平凡だが的をついた表現である。「やわらかい」「気持ちいい」という感触は、肌理の粗い砂との比較から生じたものであろう。この後の諸体験は、肌理の細かい砂の入った箱庭ですべてがなされた。

		(人数)	
肌理が細かい		肌理が粗い	
さらさらしている	(18)	ざらざらしている	(21)
やわらかい	(9)	やわらかい	(3)
気持ちいい	(8)	気持ちいい	(2)
砂 浜	(5)	粗 い	(6)
きめが細かい	(5)	砂 場	(5)
ふわふわしている	(4)	思ったほど	
手ざわりがいい	(3)	粗くない	(4)
冷 た い	(3)	か た い	(3)

II. 置いてみる世界

この度箱庭の中に置いてみたミニ玩具は、「一人の男の子」と「一本の大木」であった。これを向かって左手前から始め、全員が見てイメージがわきテーブルに帰ったら、次に中央に、その後右奥の順に置いていった。大木の場合も同じ置き方をしている。 Fig. 1 は、目の高さより見た箱庭の様子を示したものである。30名の

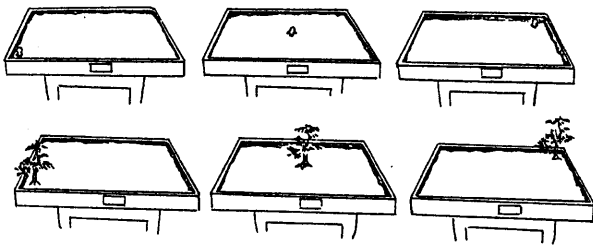


Fig. 1 目の高さより見た三つの場所の人と大木

のイメージの言語化は、さまざまな表し方がなされたので、カテゴリーを決めるのにかなりの試行錯誤を繰り返した。どうにか折り合いをつけたのが次の4つであった。1. 感情的な表現 2. 認知的な表現 3. 動きを伴った表現 4. 見えないものの表現。これからは、1. と 2. / 3.

と 4. をセットにして見ていきたい。 Tab. 2-1 は、人と大木を三箇所において、正面から眺めた時のイメージを言語化したものである。ここでは、感情的な表現と認知的な表現と思われるものを取り出してまとめ上げた。砂の上に人を一人置いた場合には、その人形に己の気持ちを重ねて受け止めているように読み取れた。一方、大木の場合には、かなり象徴的（シンボリック）な意味合いが表現されている。バウムテストなどが持つ投影法的な性格面がここでも出てきていると言えるかも

Tab. 2-1 置いてみる世界 - 人と大木 -

感情的な表現／認知的な表現

位置	砂の上に人一人	砂の上に大木一本
左手前	さみしそう (5) 孤独な (2) 寂しい (2) 孤立感 暗い 明るい ／広がった世界 (5) 未来 (3)	寂しい (3) ものさみしい 威圧感 重々しい (4) 重たい (3) 張りつめた ／ 木がポツン (3) 身近 (2) 休息 威厳 海岸 鳥取砂丘 日本庭園 芸術作品
中 央	さみしそう (3) 淋しさ (2) とまどい 一人ぼっち 不安と迷い 悩んでいる 沈んでいる 明るい / 360度空間 宇宙 停滞 静止 平穩 今	どっしりした (3) 力強い (2) ゆるがない たくましい 安らぐ 優しい 安心感 信頼感 寂しい (2) 息苦しい 孤立感 ／ サバンナ (2) オアシス (2) アフリカ の草原 シンボル・中心的存在 (3) ポツン 憩いの場 よりどころ 頼りになる場所 生き残った木 (2) 田舎の風景 障害物
右 奥	怖がっている 少しけわしい顔 暗い ／出発点 (2) 前途洋々 希望 回顧 天 反省 後ろの世界 目の前に広がる世界	寂しい (3) 淋しい 物寂しい 軽い 柔らかな なぜか暗くてこわい / 砂漠 荒野 熱い所 無人島 山奥の木 大きな森の特別な木 到達点 森の入口 森 (3) これから行くべき場所 老木

Tab. 2-2 置いてみる世界 - 人と大木 -

動きを伴った表現／見えないものの表現

位置	砂の上に人一人	砂の上に大木一本
左手前	何かを始めようとしている・目標を定めてスタート 行き先が開いている 等 (12) 遠くを眺めている 等 (7) 何かを見つめている (5) 歩みだせない (5) 誰かを待っている (2) /	森から出たところ 木の下は涼しそう 森の中から砂漠を見ている 自分の領域を守る 今のことを考える ／ 木の陰に何かが居りそう (2) 右の方に大きな湖がありそう これからたくさん木が生えて栄える
中 央	立ち止まる・さまよっている (2) ・どこにも行けない 等 (9) 迷っている (4) ポツンと立っている (8) みんなを呼び集めよう (2) 目標に向かってもう一度考え直す (2) 何かに立ち向かう (2) /	木が大きく見える (3) ・深く根づいてどっしりとしている 等 (7) ／ まわりには花や鳥がいる 木のまわりにいろいろなものが集まる (9) 動物を置きたい
右 奥	振り返ってみる (4) ・過去を振り返る (2) ・辿ってきた道を見直す 等 (10) 見渡している (3) 中心に行きたくてもいけないもどかしさ (3) 圧倒されボーゼン目標にたどり着いた (3) オーこは広いよ (2) 誰かを待っている /	行く先には楽しいことが待っていそう (3) 見守られている (3) 苦しさから抜け出せそう 世界が変化しそうだ / 森へとつながる町が出来そう 動物等が木の下に集まる (3)

しれない。Tab. 2-2 は、動きを伴った表現と見えないものの表現をまとめたものである。人の場合は、目標を定めたり、迷ったり、振り返ったりという、その人形に身を置いてのイメージが言語

化された。この人を置いてみた時には、見えないものの表現に該当するものは出てこなかった。これに比して、大木では見えないはずのもの（動物等）が登場してくる。これは、大変面白く興味のある結果であった。

Ⅲ. 掘る・積み上げるの世界

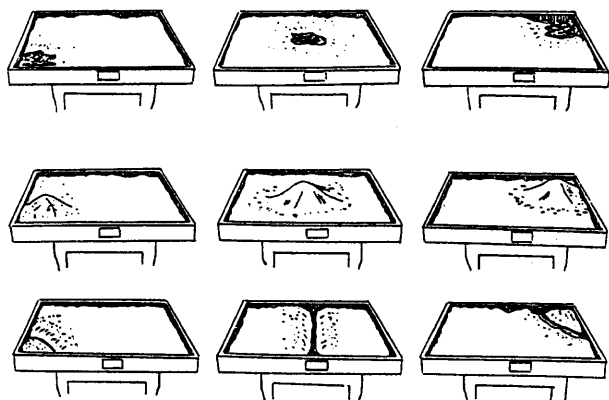


Fig. 2 -掘る(広く)・積み上げる・掘る(細長く)

掘るの世界は、大きく・広く掘ると、筋をつけ細長く掘るで構成されている。作業をした筆者のイメージは、前者が海か湖、後者は川・河、砂の積み上げは、山のイメージをもって成された。

Fig. 2 は、正面から見た三場面の絵である。作業の手順は、掘る(大きく)、積み上げる、掘る(筋をつける)の順になされている。一つの場合を見、テーブルに帰って表現化されたイメージを記録に取るというやり方を計9回繰り返

Tab. 3-1 掘る・積み上げるの世界 - 海・湖／山／川・河のイメージ -

感情的な表現 / 認知的な表現

位置	掘ってみる (大きく・広く)	積み上げてみる	掘ってみる (筋をつける)
左手前	不安な 押しつぶされそう 少し落ち着く / 海 (9) 海辺 (4) 湖 (3) 池 (3) ダム (2) 海と大地 (3) 砂漠の町 崖 古代エジプト (カイロ) ある港町 島の端	圧迫感 (2) 違和感 重い 気持ち悪い / 近くにある山 大きくない山 (2) 砂山 (3) サハラ砂漠 オアシス 渴ききった砂漠 できそこないの地球	対立している 冷たい 孤独な イメージが悪い / 斜断 隔離 右上: 社会・日常- 左下: 自分の世界 小さい川 (2) 川の左下: 孤独な世界 身近な川・村を流れる川 等 (5)
中央	すいこまれそう (2) 喜びが感じられる 安心できる こわい いい気持ちしない / オアシス (9) 湖 (5) 水たまり (3) 池 (2) 水のみ場 未知の世界 火山の噴火口	安心感 安定感 追いつめられた / 大切な・聖なる場所 (3) ピラミッド (2) シンボル 長 王様 有名な山 大きな山 ボタ山 山中心の世界 町の山	小気味よい すっきりした 懐かしい 壮大な 激しい 対立した / 二つの世界 (2) 二つに分離 等 (7) ナイル川 (2) 太く大きな川 (2) まっすぐな一本の川 (2) 天国と地獄 対立・けんか (3) 運河 土手
右奥	おだやかな (2) 静かな 漠然とした 不安 行きたくない 油断できない / 海 (13) 湖 (2) 池 (2) 広い海と大陸 (2) きれいな海 公園 リゾート地 水辺 山頂の穴	こちよい 重たい 緊迫感 追いつめられた / アルプス 遠くにある山 (4) そびえる山 信仰・守神 (3) きれいな山 (2) 存在感 冷静 スキー場	安堵感 / 大河 (2) 身近な川 (3) 森・山奥を流れる川 (6) 水のみ場 広い内的世界 きれいな水 (2) 静かな場所

させた。左手前・中央・右奥の順番は、置いてみる世界と同様である。まず、感情的表現と認知的表現でまとめたものが、Tab. 3-1 である。ミニ玩具を置いてみる世界とは一転して、感情的な表現が減少し、認知的なそれが比率的に増加してきているように思う。海や湖のイメージで大きく広く掘ってみた箱庭は、かなり具象的な言語化がなされている。これに対し、積み上げただけの山の箱庭には、かなり抽象的な表現がでている。オアシス、シンボル、長、王様、信仰・守神、出来そこないの地球といった言語化がそれにあたるように受け止めた。筋をつけ、細長く掘るという二場面（左手前：小さな空間／中央：左右の分離）では、心の内奥のものがこみ上げてきやすいということを、感じさせる表現が出ている。ただし、心理学専修生（3年生）なので、箱庭療法に関する文献を事前に読んでいる可能性はある。ここまで考察を重ねてくると、それぞれの課題ごとに一貫した提示の流れがあり、それを繰り返すうちに方向性と、物語性が知らず知らず頭の中に組み込まれていくのではないか（被験者によるのはもちろんであるが）ということにも気付いた。ここに、

Tab. 3-2 掘る・積み上げるの世界

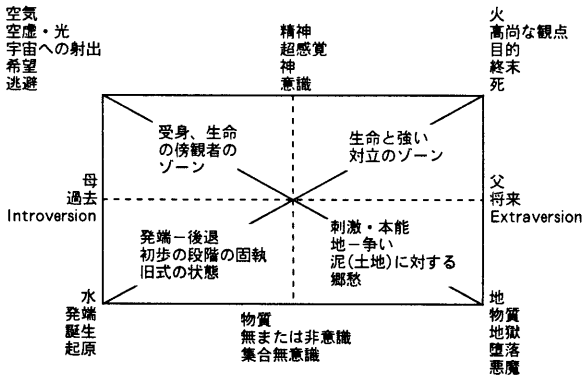
動きを伴った表現／見えないものの表現

位置	掘ってみる（大きく・広く）	積み上げてみる	掘ってみる（筋をつける）
左手前	海から向こう岸を見ている（3）水が流れている（3） たどり着いた場所 航海より帰ってきた 強い風が吹く（2）／ 動物達がやってくる 鳥がいる 泳ぎにくる人がある 波立って砂が押されている	山からの出発（3）高い所から見る（3） 山を越えてきた（2）山の向こうに何かがある こちらに向かって動きそう 何か不自然 山の存在があまりない／ 平地にこれから人が住みそう	ゆるやかに流れる川・サラサラと流れる小川 等（12）春を迎えた川 向こうに世界の広がり／ 花が一杯咲いている 両性類等がいそうだ（2） 何かが存在していそう（川の左下）
中央	大きな穴がある ぽっかりと穴が広がっている（隕石・火山口） つか噴火しそう 水がわきだしている（4）これから世界が明るくなる 方向（砂漠→青へ）／ 群がる動物達 大勢が集まってくる 何も動物がいない	山が噴火しそう（2）大地を揺るがす大地震 山の周囲を風が吹く デーンとかまえている 四方八方にすえ 広がりが 登っても登っても滑りそう／ ライオンはやさしい目で森を見渡す いろいろな方向から人が登っていく あまり人がいない 何か埋もれている	滝を持つ急流（2）ゆるやかに流れている（2）田圃の側を流れる川（3） 自己をつらぬく（2）戻れない 選択を迫られている／ 川のまわりに町が広がる 織り姫とひこ星が出会う 川遊びをしている（2） 誰かが橋を架けようとしている
右奥	海へ行って泳ぎたい（2）遠くに海が見える 等（5） 何かが到着した 人々の憩いの場・恵みの水発見 方向（砂→青）たどり着きたいのにたどり着けない 山頂にきれいな湖が見えた／ 闇が迫る 奥から手前に強風や荒波が押し寄せる	山を登っていく（3）展望が開けてきた 右上によせていく感じ 山びこしたい 左側を右上から見ている 高くて遠くて到達しそうにない／ 麓に家が建っていそうだ	川のほとりでリフレッシュ（2） 希望がわいてきた 何かを求めている やっと探した川 向こう側には目を向けたくない 小さな島が孤立している 手前に世界が広がる 橋をかけたい ゆっくりと流れている／

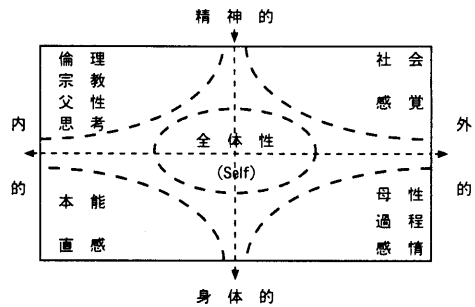
療法の基礎研究としての意味がありそう。Tab. 3-2 は、動きを伴った表現と見えないものの表現としてまとめた表である。特に、見えないものの表現は、掘る場所や積み上げる位置によって、その出現に違いがみられたことは注目に値することの一つである。

制作者である筆者がなぜ左手前から中央を経て右奥の三箇所にミニ玩具を置いたり、砂を掘ったり積み上げたのかと問われれば、「？」と答えることしかできない。どうしてこのような空間配置

なのだろうか。単に左から右ではなく箱の対角線上における展開なのだが、これも面白いテーマになりうる。少しこのことについて検討してみたい。ヨーロッパには古くから空間象徴理論が唱えられている。これは、筆跡学の伝統がもつ空間論で、バウム・テストなどにも生かされている。Fig. 3 は、木村（1985 P. 18）と秋山（1993 P. 19）に記載された空間象徴の図式である。細かく見ていくと矛盾している記述もある。たとえば、父と母／父性と母性の位置が逆になっているとい



木村（1985）P. 18 より



秋山（1993）P. 19 より

Fig. 3 空間表象の図式の二例

ったことである。この図式は、あまり厳密に当てはめるべきものではなく、あくまでも参考程度にすべきである。しかしほとんど素人の人がいずれかの本だけを読み、それを信じ込んで解釈を始めたらおかしい誤解や混乱を招きかねない。この事は、しっかりと肝に銘じるべきである。少し踏み込みすぎたようなので元に戻すと、筆者が暗黙の内に持っている方向性や物語性（無意識界の）もある程度これで読み取れるかもしれない。「左は内界／右は外界のイメージが表出され、それが置く／掘る／積むという一連の作業に結び付いた。」とまあこの程度に自己納得している内はいいのだろうが、クライアントの作品をこのように先入観をもって解釈したりすることには十分なる注意と内省がいる。

もう一つ方向性と物語性がある絵本を紹介したい。それは、安野光雅の「旅の絵本Ⅰ～Ⅳ」である。舟（ボート）で海からやってきた旅人が、馬を買い、村や町・都市を通して旅を続けていく。そしてまた馬と別れて、海に漕ぎ出すという物語がⅠ・Ⅱ／Ⅲ／Ⅳへと展開していく。彼のこの絵



Fig. 4 安野光雅「旅の絵本Ⅰ～Ⅳ」より：左の世界より右の世界への旅

の世界は、左から右へとまさに流れている。ただし彼の場合は、ほぼ中央あたりに旅人が描かれて

いる。筆者のように対角線上の方向ではないので、なぜ左手前から右奥へとこだわりっているのかを直接裏付けてくれるものではない。

ここからは、この3年の間に読んできた箱庭療法に関する本の内容で、今うまく相互に結び付きかけてきていることを取り上げてみたい。河合（1995／1986の文庫本化）は、Kalff女史の Sandspiel の持つ特徴の一つに次のような点を上げている。

「自由にして保護された空間」を「われわれの関係の中につくりだす」ということである。

これは、心的空間の存在を前提として、その中にある箱庭の空間というものが意味を持つと考えているのである。ここでは、「一つのまとまった表現」をすることが要求される。二重の守りを前提としてこそ、人間はその世界を表現することができるのであり、二重の束縛と感じれるときには、作品は意味を失う。箱庭をつくる事には、①二重の守りがある、②砂に触れるということによって望ましい退行が生じやすくなる、③心の深層の表現が生じやすいという利点のあることが示されている。このように、箱庭の「枠内」においてなされる限り、相当なことが守られた空間の中で表現され、統合される過程が生じるのである（註、筆者なりに文章をまとめ直した）。

この語りかけは、今回のような非常に単純化された場面設定の世界においても「そうだ」と言える。同じ本の第4章「心理療法の原風景より」にも興味深い記述があった。

「イメージ」とは、無意識が意識へともたらすメッセージであり、大量の心的エネルギーを負荷されている。このイメージが、意識に近いか無意識に近いかによって、その意味は異なってくる。次元が「深く」なるにつれ、心的エネルギーの量が大となり、そこに「感動」を伴うところが特徴的である。心に悩みを持つ人が、無意識からのイメージを一つの作品として仕上げる。それを治療者とともに目の前に見ながら味わうことができるので、このことが治療的な意味を持つてくるのである。見守られながらの、それも治療者と箱庭の枠の中という二重の守りの中にあるからこそ、この方法が生きてくるのである。

無意識の深みにいたろうとするとき、われわれは適切な「通路」を必要とする。ただ単純な箱庭療法の箱が、その大切な通路の役割をしている（広義には治療者の人間性もその「通路」の一部なのだ）。クライアントが砂にふれるとき、彼はすでに第二の扉を開いたといっている。

“箱の枠”というものが、まさに通路としてどれだけクライアント（および治療者）を守っているか、計り知れぬものがある。このような適切な「通路」を用意することによってこそ、われわれは「深み」に達することができ、そこから帰ってくることもできるのである。（上野：読者は、「通路」を通して分離感を味わうというよりは、自分の属している現実と不思議な世界との、『地続き』の連続感を味わえるのである。）

この「通路」という表現は、児童文学者の上野瞭がファンタジー論の中で用いた用語を、河合が借用したとのことであるが、とても魅力のあるキーワードである（『現代の児童文学』中央公論社

1972)。「深い世界での体験は、この『地続き』の連続感で日常的な世界へとつながっているものでなければならない」とする河合達のこの読み取りは、治療にあたっては特に重要である。

次からの記述は、河合隼雄と上田閑照の「癒しと宗教」についての対談の中にあったもののうち、特に箱庭に関連した対話を取りあげてみた。

(上田)「限りないひらけ」が『虚空』であり、世界は虚空に於てある。われわれが世界内存在として世界のうちにあるというとき、最初から虚空に於てある世界に於てあるわけなのだ。...この世界が虚空の中にある。この世界そのものが二重になっているということを考えている (P. 20-21より。ただし、文章は少しまとめ直した)。(上田)しかし、われわれがこうして生きてる世界は、この世界だけではない。それを越えたところにある。そういうセンスが開かれる。その意味は非常に大きい。(河合)それがほんとうにうまく開かれるならば。(上田)本当に開かれた場合には、もうイメージも消えて、それこそ虚空のようにになっている。イメージが出てくるというのは、やっぱり世界と限りない開けとの移行帯みたいなところ。そしてイメージの材料になるものは、やっぱりこの世界にある。(河合)イメージというのは、この世界とのつながりにおいてできている (P.30)。

「箱庭から異界がのぞく」の項では、さらに枠の中でもものすごく守られた形で、あちらの世界が表出されてくることに触れている。

(上田)説明しようとして言っていることは、みんなこちらの世界のことにしてしまう。(河合)そうそう。たしかにそういう風に置いているんだが、違うことがちゃんと出ている。(上田)つまり、向こうの世界のことをこれで言おうとしているわけ。だから治癒力になる。(河合)ちがう世界のつながりがどう出てくるかだ。(上田)深くなってくるというのは、向こうの世界のことをこっちで表現することである。(河合)だから枠で守っている。そうしないと危なくてしょうがない。向こうに行ったきりになるから (P.33より)。.....(上田)やっぱり枠があるということと、その枠がある場所が枠のないところにあるという、これが重なってということでないといけない。「世界／虚空」の二重性の中にですね (P.34)。

このような見方・考え方は、普段ほとんど聞くことがないだけに、「そうだな」とうなづけるものがある。最後に紹介したいものとしては、河合と安野光雅の話し合いがある。箱庭療法の放映を観て、余りにも独断的な解釈がなされたことに對し不信感を抱いていた安野ではあったが、河合の見守りの中で箱庭作品に初挑戦したのである。その時のことを、以下のように述べている。

砂に手をついた瞬間、砂の記憶が戻った。砂というより、地面の記憶といってもよい。砂の面に筋(すじ)を描いた。筋を深く掘ると、箱庭の底のブルーの色が見えた。...そこには「俯瞰」のかたちが現れ、田舎の川を地図のように俯瞰的に記憶しているような気がした。記憶に少しずつ修正が加わって、俯瞰図になったかもしれない (P.263)。...やはり、箱庭は(絵でも同じで)表現であって、本物ではない。こころの中に、川のイメージが入っているにすぎない(P.265)。...

誰に命令されたのでもないのに、ひとりでに故郷の抽象が生まれつつある。川らしいものが生まれ、故郷らしきものを形づくり、痕跡を消しつづけてつくった、わたしのこころの痕跡にほかならなかった (P. 266)。

「旅の絵本Ⅰ～Ⅳ」を描いた画家の初挑戦は、理屈に生きる者とは違った捉え方がなされているだけに、とても新鮮で興味深い。今回の研究は、久しぶりの箱庭に関するものであった。人形一つ、大きな木一本を置いただけなのに、たくさんのイメージが表現された。また、砂を積み上げる・砂を掘るといったただそれだけの变化なのに、いろいろなイメージの言語化がなされた。このような分析はとても素朴なものであるが、案外基礎的研究と臨床的研究の接点となりうるものを潜ませている可能性もある。この論文で追究した6つのテーマは、詳しく分析・解釈するところまでには至らなかった。しかしながら、各々のテーマに対し、これだけの言語（ことば）化が30名の女子学生によって成されたということは、十分注目に値するものであると考えている。

文 献

- 秋山幹男 1977a 幼児のサンドプレイ(3) — 大学生による性の判断と「全体的な感じ」の評定 日本心理学会第41回大会発表論文集 1006-1007
- 秋山幹男 1977b 幼児のサンド・プレイ(箱庭作り) — 49,50年度: カテゴリー別にみた初回作品の玩具分析 広島文教女子大学幼児教育研究会「幼児教育の研究」 2 46-56
- 秋山幹男 1982 一女子学生の連続箱庭作品をもちいた投影法的研究 — 同一年齢女子青年たちの反応について 広島文教女子大学紀要 17 55-74
- 秋山さと子 1993 ユング心理学と箱庭療法 日本総合教育研究会編 箱庭療法事例集 6-21 千葉テストセンター
- 安野光雅 1977 1978 1981 1983 旅の絵本 Ⅰ～Ⅳ 福音館書店
- 安野光雅・河合隼雄 1998 生きることはすごいこと 第8章 箱庭療法は人間を語る 講談社
- 内田栄子・野村恭子・秋山幹男 1977 幼児のサンド・プレイ(箱庭作り) — 48年度: 性別による使用玩具の比較 広島文教女子大学幼児教育研究会「幼児教育の研究」 2 35-45
- 上田閑照・河合隼雄 1995 癒しと宗教 仏教 no.31 「特集 癒し」 2-36 法蔵館
- 河合隼雄編 1969 箱庭療法入門 誠信書房
- 岡田康伸 1984 箱庭療法の基礎 誠信書房
- 木村晴子 1985 箱庭療法 — 基礎的研究と実践 創元社
- 平松清志・山口茂嘉 1998 日本における箱庭療法に関する基礎的研究の展望とその課題 岡山大学教育学部研究集録 109 39-51
- 山下 勲 1964 ウェルトテストに関する方法論的研究 広島大学教育学部紀要Ⅰ 13 145-155